

歯科技工士としてリハ・栄養・口腔の三位一体施策にかかわっていくために

『Dr. 藤本紙上セミナー

口腔の老化・口腔ケア・摂食嚥下障害のキホン

—リハ・栄養・歯科の三位一体に向けて—』を読んで

トグチ・メディカル・ラボ（千葉県旭市）

外口晴久 TOGUCHI Haruhisa

私のラボでは、医科歯科連携の歯科技工物——口腔内装置や義歯を中心に製作している。私が「高齢者の義歯」に興味を持った理由は、2023年に定年退職するまで総合病院の勤務歯科技工士としてあまりに多くの不適義歯を目にしてきて、あるとき「こんな義歯で患者さんはきちんと食事ができているのだろうか…」と思ったのがきっかけだった。歯科衛生士が病棟に口腔ケアに行くようになり、入院患者が使用している汚れた義歯や、破折したまま装着している義歯、瞬間接着剤などで修理した義歯などを歯科技工室に持ち帰るようになった。そのような患者は歯医者嫌いなので、義歯に不具合が起ころうと歯科医院に行かないのである。

それまでの30年近くは、病院内の技工室でインプラントやセラミックス中心の仕事をしてきたのだが、元来が凝り性なので気になりだしたら止まらない！ 義歯のことを深掘するためさまざまな講習会に通い始め、本を買いあさった。その中の一冊に藤本篤士先生他編著による『絶対知りたい義歯のこと』（医歯薬出版）があった。この本は主に歯科医師、歯科衛生士向けだったこともあり、咬合様式や顎運動ではなく、多職種協働を中心に書かれた内容だったが、私に刺さり、まさにバイブルとなった。今回ご紹介する『口腔の老化・口腔ケア・摂食嚥下障害のキホン』は藤本先生の新書で、期待しながら拝読した。

*

本書のサブタイトルは『リハ・栄

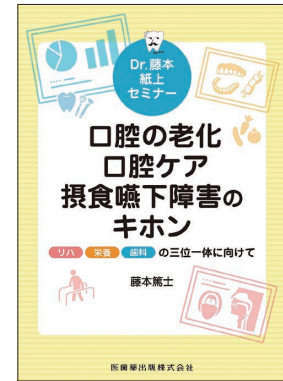
養・歯科の三位一体に向けて』となっている。本書では「近年、国の政策として高齢者の自立支援・重度化防止のために『“栄養”“リハビリテーション”“口腔管理”の三位一体』の連携強化がうたわれ、医療の世界では“口腔”が“栄養”と“リハビリテーション”と連携していく重要性和必要性が増していく」と述べられている。しかし、歯科技工士がたとえば補綴物を作るときに摂食嚥下を考えているかというところとNoと言わざるをえない。なぜなら摂食嚥下については、歯科技工士学校でもほとんど教えていないし、歯科技工士向けのセミナーもない。これは口腔ケアに関しても同様である。私は「このままでは歯科技工士が三位一体の連携に入っていけない」と考えている。本書は、現状ではほぼ門外漢の歯科技工士にとって最適な教材である。

*

本書は、まるで藤本先生のプレゼンテーションを視聴しているかのように展開されていく。

まずPart1は「口腔と老化と日本の医療制度」で、急性期、回復期、慢性期、終末期の各ステージで老化した口腔をどのように支えていけばよいかを説明している。ほとんどの歯科技工士は模型だけ、いわゆる机上だけで技工に関わっていると思われるので知っておくべきである。

Part2は「口腔ケアのキホン」で、歯科技工士が口腔ケアを実施することはないが、歯科衛生士が何をしているのか、また、誤嚥性肺炎についての勉



藤本篤士 著

定価 4,950 円

(本体 4,500 円+税 10%)

B5 判 2 色刷 / 152 頁

医歯薬出版株式会社 刊

強になる。

Part3は「摂食嚥下のキホン」である。食事は“嚥む”だけではない。“飲み込む”ことを忘れてはならない。摂食嚥下を知らずして多職種連携はできない。

そしてPart4は「摂食嚥下障害症例集」である。口腔外科に勤務していた私としては、もっと早くこの症例集に出会いたかったと思わずにはいられない。舌を含めたさまざまな障害に、歯科技工士も製作するPAP（舌接触補助床）、PLP（軟口蓋挙上装置）、顎義歯といった装置の装着や訓練で対応した症例をまとめた内容となっている。

*

歯科技工士が「リハ」「栄養」「歯科」の三位一体に関わるには、そして医療人として多職種連携に関わるためにも、口腔の老化、口腔ケア、摂食嚥下障害の知識は欠かせない。本書は私の新たな必携書となった。病院勤務の歯科技工士はもとより、加齢に伴う自身の状態と生活の変化に適応・機能しうる高齢者の義歯製作に携わるあらゆる歯科技工士の皆様にも本書をお勧めしたい。

とぐちはるひさ：所属学会：日本顎咬合学会（認定歯科技工士）、日本歯科技工学会（代議員）、日本摂食嚥下リハビリテーション学会、日本脳卒中協会他。